

靴の歴史散歩 ⑪②

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

日本の近代皮革産業、製靴業の祖、西村勝三翁については、『西村勝三翁傳』（大正十年一月・西村翁傳記編纂會・代表大澤省三）を筆頭に、数多くの文献が揃っているので、その業績も知れるが、一方の雄、浅草皮革産業、製靴業の祖、弾直樹については、伝記どころか会社史料も皆無なので、掴みどころがないというのが現状である。

これまでに、弾直樹の製革、製靴業の片鱗でも知りたいと、折りに触れメモしてきたものがあるので、それに業界年表で一番信頼出来る『大塚製靴百三十年年表 草稿』（渡辺陸 編）を照合しながら、その足跡を辿ってみたい。

十三代 弾左衛門（直樹）1823—1889の軌跡

◎明治元年（1868）

（1・27）弾左衛門、弾内記と改名する。

◎明治3年（1870）

（9・17）弾内記、兵部省から皮革製造用達を申し付けられる。

（閏10・7）弾内記、王子滝野川の旧幕府反射炉跡地（現・北区滝野川国税庁醸造試験所）の一部を借用。

（12・13）弾内記、直樹と改名。

◎明治4年（1871）

（3・28）弾直樹、アメリカ人製革技師チアルレス・ヘンニンゲル（37歳）を雇入。

（4・14）弾直樹、滝野川の製革、製靴伝習所で、丈夫で柔軟性に富み、撥水性もある皮鞣しに成功し「茶利革」と命名、それを兵部省に供覧する。（茶利革とは、技師チアルレス・ヘンニンゲルの名に由来して名付けられ、戦後も流通通用していた。）

（10・24）軍卒の短靴20足を、初めて竹橋の造兵司に納入する。

（11・－）弾直樹、水町久兵衛の援助で「弾・水町組」と改組。

◎明治5年（1872）

（1・－）弾・水町組、大蔵省勸業司所屬地、浅草橋場の旧銭座跡（現・台東区橋場1-1-6東京都人権啓発センター）を借用、滝野川より移転する。

（3・－）弾直樹、兵部省武庫司から、明治14年まで、10年間軍靴製造を申し付けられる。

あと次号に続く

写真は、右から大塚製靴会長 大塚斌^{あきら}さん、そして筆者、左は同社監査役 渡辺陸さん、弾直樹の橋場工場跡地にて（平成9年7月撮影）

